

Round 11

『フィールド・オブ・ドリームス』 (フィル・アルデン・ロビンソン監督、1989)

ブロードウェイ45丁目、Plymouth Theatreでのレイ・リオッタは見事だった。

ギャング(『グッド・フェローズ』)やポリスマン(『コップランド』)などタフガイ役が多いレイが感情を抑えながら内面の苦悩を浮き立たせる難役を完璧に演じたのは、まだまだ冬の上着が要する2004年4月上旬。舞台終了後15分経ってレイと話した時、彼の意識の半分がまだ役柄の中にあっただけの当然。骨の髄まで役に切り切った直後に、ボタンひとつで素(す)に還れるわけがない。ひと言ひと言をゆっくり重ねる度に彼が「こちら側の世界」に戻って来るのがわかった。レイ・リオッタが世間に知られるきっかけになった映画『フィールド・オブ・ドリームス』は、主演のケヴィン・コスナーの代表作。二人とも1955年生まれ。野球を夢の象徴としたユニークな原作を元に父子、家族、変わりゆく時代を感情豊かに描く。

奥さんと娘、ローンを支払い中の家とコーン畑を持つ35才の男は、ある日、畑の真っ只中で、どこからともなく不思議な声を聴く。

[If you build it, he will come. それを作れば、彼が来る]

この不明瞭な言葉の私の読解は「行動を起こすと奇跡が起きる」

謎の声を聴いてから農夫は深く考え始める。「俺の(亡くなった)親父は自分のハートに従って行動したことはなかった。このままじゃ、俺も同じ。うちの畑をつぶして、野球場を作ろうと思うんだ。俺はイカれてるかい?」と真夜中に奥さんに問いかけると「イカれてるわ。でもね、本当にやりたいと思えば、やればいいよ」とエイミー・マディガン演じる奥さん。この夫の発想と奥さんの同意は、一般的にはほぼ皆無。だから夢を叶える人は稀有などころか、夢さえない夫婦が主流。その証拠に酒を飲んでる。夢を追う人は酒を飲んでる場合じゃない。

農夫の父親のように、夢をあきらめ、現状に満足した男には男の価値がなく、そういう父親が家庭の精神破壊の大きな原因。主人公は、自分自身が価値なき男になりつつあるのを感じていた。私の知る数多くの子どもたちが「大嫌い」「役立たず」「ケチ」「いぼってる」「関係ない」と父親を評



▲レイ・リオッタ(左)とケヴィン・コスナー ©Universal Pictures

し、話題にするのもイヤ。作品中、野球帽を被り、トラクターを操り、変わらぬ農作を繰り返すだけの男たちやお金だけを追う者たちが夢を失った人間の代表として登場。二番目に登場する謎の声は

[Ease his pain.]

「彼の苦しみを癒せ」と言っても一体誰の苦しむ? 「夢半ばだった者の悲しみを知れ」が私の理解。愛や平和、核廃絶・反原発など当然のことを口にするに疎外される社会には悲しみを秘めて生きる人が多い。最後の言葉は

[Go the distance.]

ボクシングでは、よく使われる表現で「最終ラウンドの最後まで倒されるな」つまり「決してあきらめるな」これらのキーワードを軸に展開されるストーリーは、型にはまったカチコチ人間には、とてもついて行けなくなるが、夢を信じる人には快適なフルコース。原作者のW.P. キンセラもロビンソン監督も観客にふるいがかかることを承知でトップギアで進む。面白い試みは、夢なき登場人物には眼前で展開される光景が何も見えていないという設定。確かに夢なき人には何も見えていないように。

レイ・リオッタがケヴィン・コスナーに静かに発する終盤のセルフが作品の核心を突く「No. It was you」…1時間47分の作品は、この言葉にすべての答えを見出し、ピリ

オドがうたれる。

実在の大リーガー、シューレス・ジョーを演じたレイのグローブさばきがとても粋。大リーグのスター選手が後樂園球場に集結した1992年、来日中だったケヴィンが練習に飛び入り。ケヴィンの華麗な動きに選手たちが「彼は本当にうまい!」と驚嘆。スポーツを扱う邦画のほとんどは目も当てられないが、ハリウッドのプロ根性こそがプロ。

同作が劇場作品の遺作となったバート・ランカスターには、まさしく最後を予感させるような役柄だった。『ボクサー』(1970)でアカデミー賞候補だったジェームス・アール・ジョーンズが印象に強い脇役を務めた。ジェームス・ホナーのスコアもオスカーにノミネートされた。

1990年3月の試写会で淀川長治さんが、年初にもかかわらず、同年のベスト作品に決めた。

ブロードウェイの舞台後に役から抜け出せなかったレイのように『フィールド・オブ・ドリームス』には、夢から抜け出せなくなる、ありがたいパワーがある。撮影に使われた野球場は残され、訪れる人々を子供気持にしている。「夢」と「生きる」は同義語だということを忘れた"機械人間"が減る社会浄化作用を持つ傑作。

えっ! 親たけど、夢がない?…
If you build it, he will come.

(Lucky Day)



▲フランク・ランジェラ(中央)と共演したブロードウェイ劇『Match』(2004年)

Round 12

『カッコウの巣の上で』 (ミロス・フォアマン監督、1975)

傑作の特徴は、特定の時代の特定場面を描きながら、全世界のあらゆる状況にピッタリと当てはまるどころ。精神病院を舞台にした『カッコウの巣の上で』は、全映画史で上位20本以内にランクされ、主演のジャック・ニコルソンは「映画史上最高の演技」ランキングで堂々1位(2012年「Total Film」選出)。

周到に計算された業績作戦で、すっかりフヌケにされた精神病院の患者たちは、われわれ一般市民の象徴なのは明らかだが、多くの人がその比喩や映画の意味するものにちっとも気づかない。それほどにフヌケ作戦は成功している。管理する体制派=独裁者という図式を明快に描きアカデミー賞主要5部門を受賞。

「学校の先生そのもの」と生徒たちが口をそろえ、「お母さんとそっくり」と子供たちが言い、そして「うちの婦長とまったく同じ」と看護婦さんが驚く院長を演じたルイーズ・フレッチャーもアカデミー賞を獲得。自分が正しいと信じる大間違い女はアメリカ映画協会が選ぶ「歴代悪役ランキング」で5位に選ばれている。この手の母親は日本でももっとも標準。賢い人たちは、同じことのみを繰り返すことが大いなる悪だとわかっているが、現実には、その悪が官僚や政治家、財閥などの体制側。

実験に基づいたケン・キージーの原作を気に入ったカーク・ダグラスが得た映画化権を息子のマイケル・ダグラスが30才の時に製作。

高校一年生になった1976年4月に高松スカラ座で『カッコウ』を観たのはラッキーだった。附属中学から来た生徒たちの多くは、進学が人生の最重要事項だと洗脳され切っていて、管理されることに疑問を抱くどころか、自ら崖に向かって行進。目隠しのハチマキも自分で締めて。当時の大人たちは、山にゴルフ場、川にダム、海はセメントで固め、道は田んぼ道までアスファルト、工場は垂れ流し、あっという間に50を超える不要な原発を作って大壊滅作戦を簡単に実行した。それを「開発」とか「開発」と呼んで。



ルイーズ・フレッチャー、ジャック・ニコルソンもオスカー受賞 ©United Artists

コメディ作品『ダーティファイター』でイカれたおっさんをノックアウトした時のイーストウッドのセリフ「アホウ相手は簡単さ」の通り、どう見ても取り返しのつかないバカげた悪事も「アホウ(市民)相手は簡単」に進んだ。

20万人が避難した2002年8月のチェコ大洪水直後にブラハを訪れた時に買った映画雑誌の表紙は、孫たちと一緒に写ったチェコ出身のミロス・フォアマン監督。幼い頃、両親をナチスの収容所で殺され、撮った映画は当局から公開禁止にされ、1968年にアメリカに亡命し、その後も反戦、反骨作品を作り続けた監督が故郷の雑誌の表紙を飾っていたのが本当に嬉しかった。ミロス監督は、15才の私に世界をハッキリクッキリと見せてくれた。町でも家庭でも、学校でも職場でも、旅先でもビジネスの場でも、政治でも宗教でも『カッコウの巣の上で』に当てはまらなかった状況はない。映画のおかげで、自分がどうすべきかは考える前にわかった。ミロスは私の恩人。

大人たちの決まり文句「しょうがない」「やっても無駄」「長いものには巻かれる」を既に何千回も聞いていた15才の私は、宝物のセリフを得た。シャワー室のイスにポサ〜と座る患者たちに嫌気が差した主人公。演じるのはジャック・ニコルソン。細身のジャックが、みんなの

目の前にデーンと座る1メートル四方の大理石製のような給水台を持ち上げると宣言。「そんなのできっこない」と患者全員。腰を落とし、大理石を抱え、額に血管を浮かび上がらせ、ウォー! っとうなるジャック。結局は動かなかった。ハハハと息を切らせながら「俺は、少なくともやってみよう」とジャック。決して服従しない主人公の「俺はお前とは違うぜ」という、映画の芯、人間の背骨がここにある。残念ながら現実には、悪い奴らがやりたい放題、好き放題。「大衆なんか、気がつかないようにダメさばい。次第に大きなウソを信じるさ」ナチスの宣伝担当ゲッベルスの作戦は各地でうまくいっている。

両親共に啞聲だったルイーズ・フレッチャーはオスカー受賞時に、手話で両親に話しかけた。

"I want to say thank you for teaching me to have a dream. You are seeing my dream come true. Thank you."

「お父さん、お母さん、夢を持つことを教えてくれてありがとう。私の夢が叶うのを今、見てくれるわね。ありがとう」

歴史に残る悪漢(=自分は正しいと信じる母親像)を演じ切ったルイーズは、歴史に残るスピーチを残した。

(Lucky Day)